

1 - 5 2016年の日本の紫外線

国内3地点(札幌、つくば、那覇)における2016年の紅斑紫外線量日積算値の月平均値を図1-13に示す。ここでは、参照値(1994~2008年の月別累年平均値)との比較として、参照値からの差が標準偏差以内のときを「並」、それより大きいときを「多い」、それより小さいときを「少ない」としている。札幌では5~8月にかけて変動が大きく、6月はその月として観測開始(1991年)以来第2位の少ない値となり、8月はその月として観測開始以来第2位の多い値となった。つくばでは年間を通して概ね並であったが、5月は4年連続で多く、2016年はその月として観測開始(1990年)以来第4位の多い値となった。那覇では、1~6月は概ね並であったが、7月以降は多い月が多く見られる。特に、月平均オゾン全量が最小値となった10月は、その月として観測開始(1991年)以来第3位の多い値となり、また1年を通して最も紅斑紫外線量が多い7月もその月として観測開始以来第5位の多い値となった。これらの特徴は、各地点の日照時間やオゾン全量の状況などと概ね整合している。

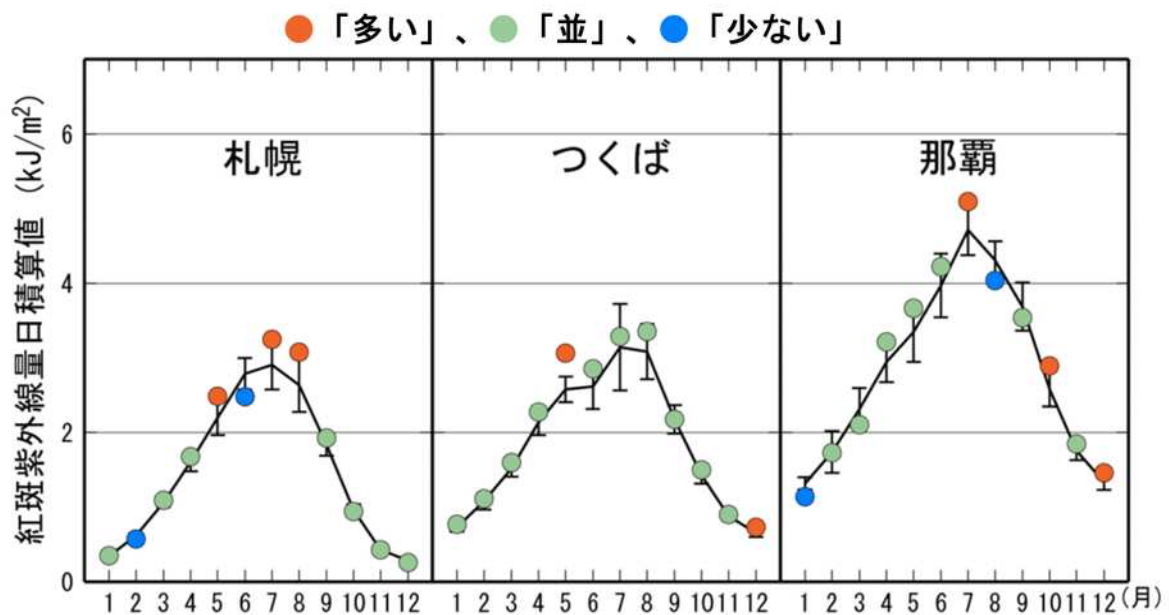


図1-13：2016年の紅斑紫外線量日積算値の月平均値

国内3地点(札幌、つくば、那覇)における紅斑紫外線量日積算値の月平均値。印は2016年の月平均値。実線は1994~2008年の月別累年平均値。縦線はその標準偏差。